

諏訪之瀬島の火山活動解説資料（令和7年1月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方气象台

御岳^{おたけ}火口では、噴火活動が続いています。

噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,500mまで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約500mまで飛散しました。

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側やや深部におけるマグマの蓄積量の増加を示唆するわずかな変動が認められています。島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しています。

御岳火口では長期にわたり噴火活動が継続しており、今後も火口周辺に大きな噴石が飛散する噴火活動が継続すると考えられます。

御岳火口中心から概ね1.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和6年3月27日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①②、図3-①～④、図5-②③）

御岳^{おたけ}火口では、噴火活動が継続しています。噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,500m（2024年12月：1,400m）まで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約500mまで飛散しました。爆発の月回数は16回でした（2024年12月：9回）。

御岳火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、集落（御岳火口から南南西約3.5km）で降灰と鳴動が時々確認されました。

・ 地震や微動の発生状況（図2-③、図3-⑥～⑧、図4、図5、図6-②）

諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しており、月回数は308回（2024年12月：194回）でした。5日08時54分には振幅の大きな体を感じる地震が発生し、島内の震度観測点（鹿児島十島村諏訪之瀬島）で震度1を観測しました（マグニチュード2.6）。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和7年2月分）は令和7年3月10日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は、月回数は254回（2024年12月：272回）と少ない状態で経過しました。震源が求まった火山性地震は、御岳火口付近から島の西側にかけての深さ1 kmから6 km付近に分布しました。

・地殻変動の状況（図2-④、図5-①、図6-①）

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側やや深部におけるマグマの蓄積量の増加を示唆するわずかな変動が認められています。ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、火山活動による特段の変化はみられていません。

・火山ガスの状況（図4-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり2,500トン（2024年12月：1,100トン）でした。



図1 諏訪之瀬島 噴火活動の状況（1月22日 キャンプ場監視カメラ）

- ・御岳火口では、噴火活動が継続しています。
- ・噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,500m（2024年12月：1,400m）まで上がりました。
- ・弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約500mまで飛散しました。

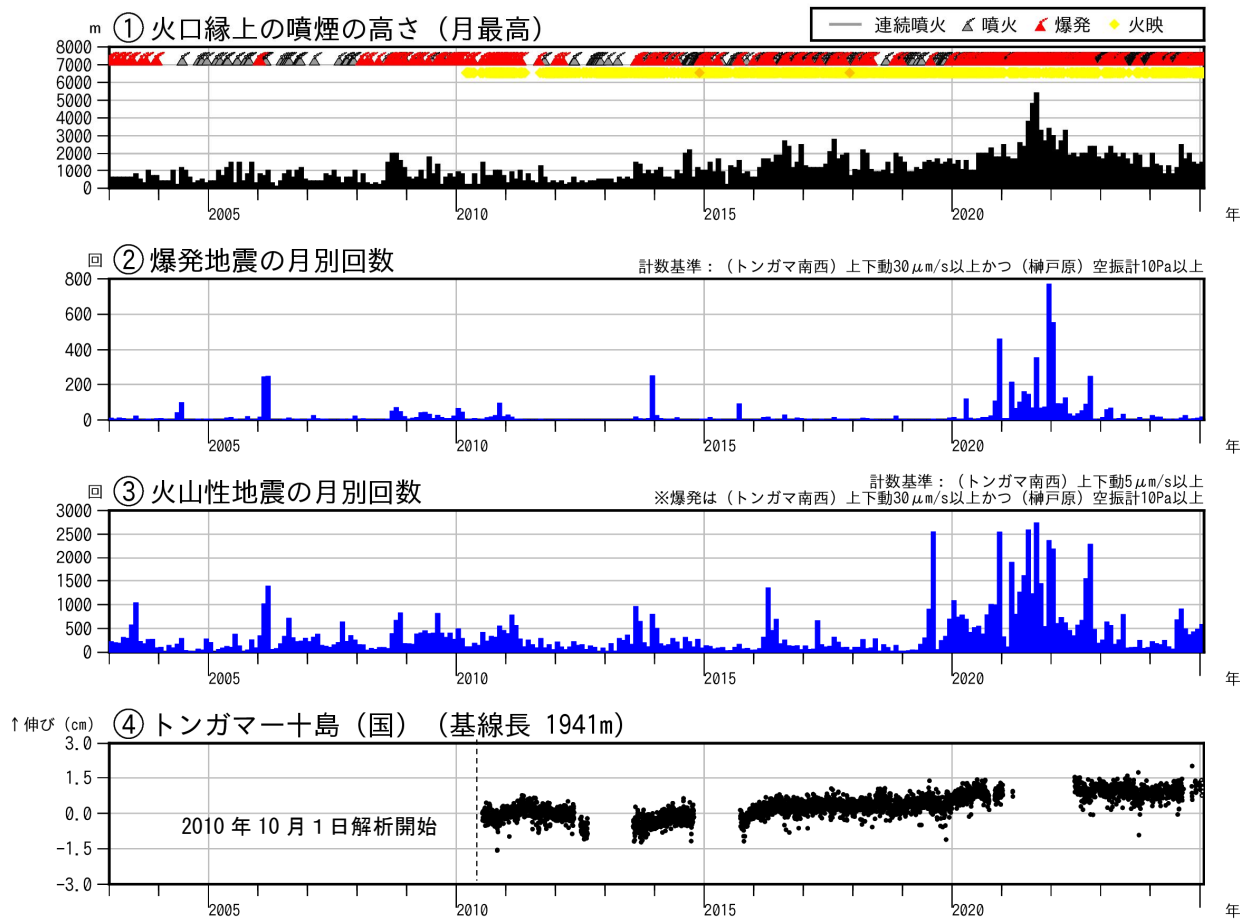


図2 諏訪之瀬島 長期の火山活動経過図（2003年1月～2025年1月）

御岳火口では長期にわたり噴火活動が継続しています。

2024年8月29日から12月3日まで、寄木カメラ障害のため噴煙の最高高度が観測できていない可能性があります。

ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

④の基線は図7の①に対応しています。④の基線の空白部分は欠測を示しています。

④2024年9月1日の観測点修繕工事（トンガマ観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院

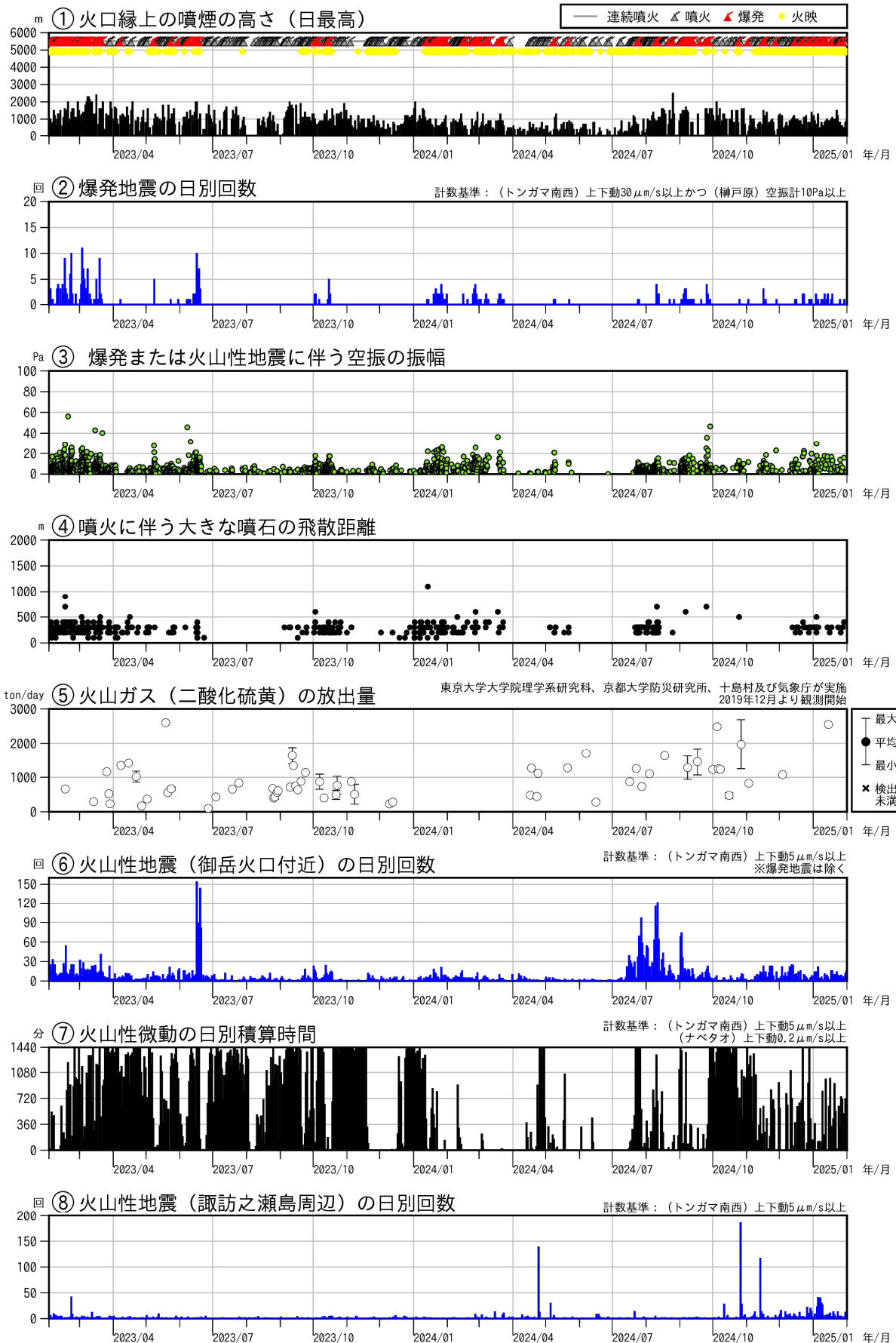


図3（前ページ） 諏訪之瀬島 最近の火山活動経過図（2023年2月～2025年1月）

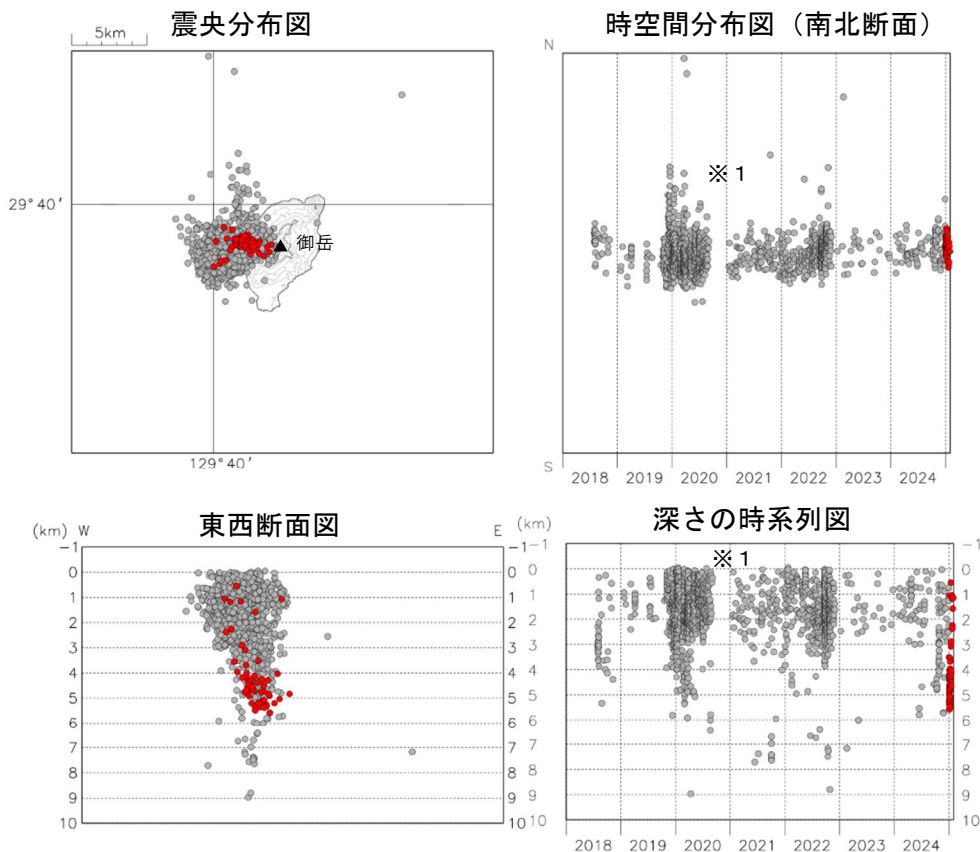
< 1月の状況 >

- ・ 噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上 1,500m（2024年12月：1,400m）まで上がりました。
- ・ 爆発の月回数は16回でした（2024年12月：9回）。
- ・ 弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約500mまで飛散しました。
- ・ 火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり2,500トン（2024年12月：1,100トン）でした。
- ・ 諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しており、月回数は308回（2024年12月：194回）でした。
- ・ 御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は、月回数は254回（2024年12月：272回）と少ない状態で経過しました。
- ・ 火山性微動は主に噴火に伴って発生しました。

2024年8月29日から12月3日まで、寄木カメラ障害のため噴煙の最高高度が観測できていない可能性があります。

火山ガス放出量は噴火の直後に計測した場合、値が大きくなり、噴火の発生前に計測した場合には小さくなる傾向があります。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。



- : 2025年1月の震源
- : 2018年1月～2024年12月の震源

図4 諏訪之瀬島 震源分布図（2018年1月～2025年1月）

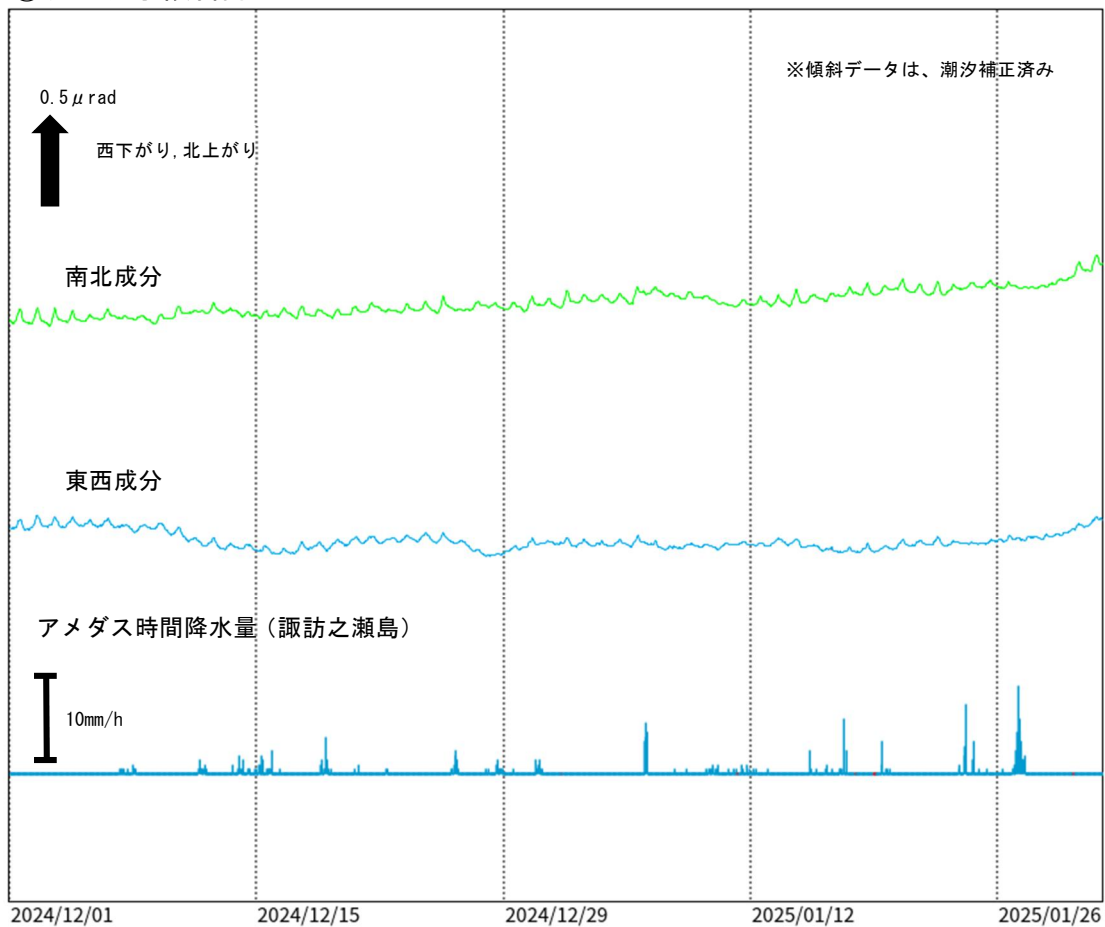
< 1月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、御岳火口付近から島の西側にかけての深さ1kmから6km付近に分布しました。

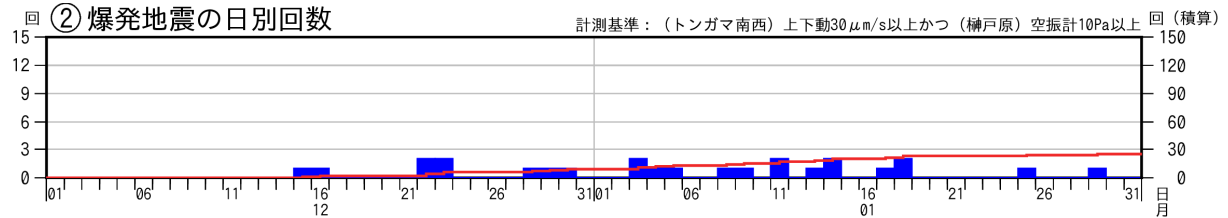
2018年8月より諏訪之瀬島の震源決定をしています。

※1 2020年9月5日から2021年1月10日まで、一部観測点の障害により検知力や震源の精度が低下しています。

① ナベタオ傾斜計



② 爆発地震の日別回数



③ 噴石の飛散距離

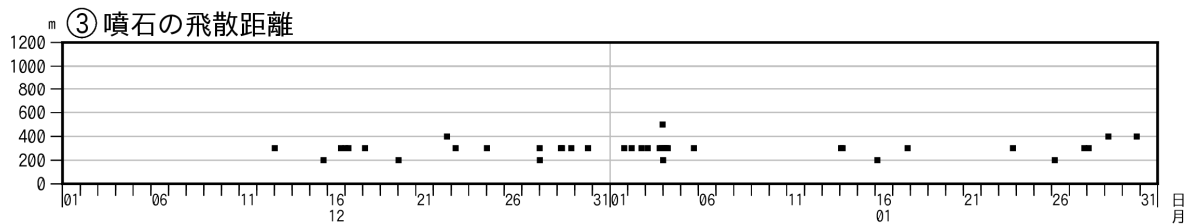


図5 諏訪之瀬島 ナベタオ観測点の傾斜変動と噴火活動（2024年12月～2025年1月）

- ・ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、火山活動による特段の変化はみられていません。
- ・爆発の月回数は16回でした（2024年12月：9回）。
- ・弾道を描いて飛散する大きな噴石は、火口中心から最大で約500mまで飛散しました。

傾斜データは出水期を中心に降水の影響を受ける場合があります。

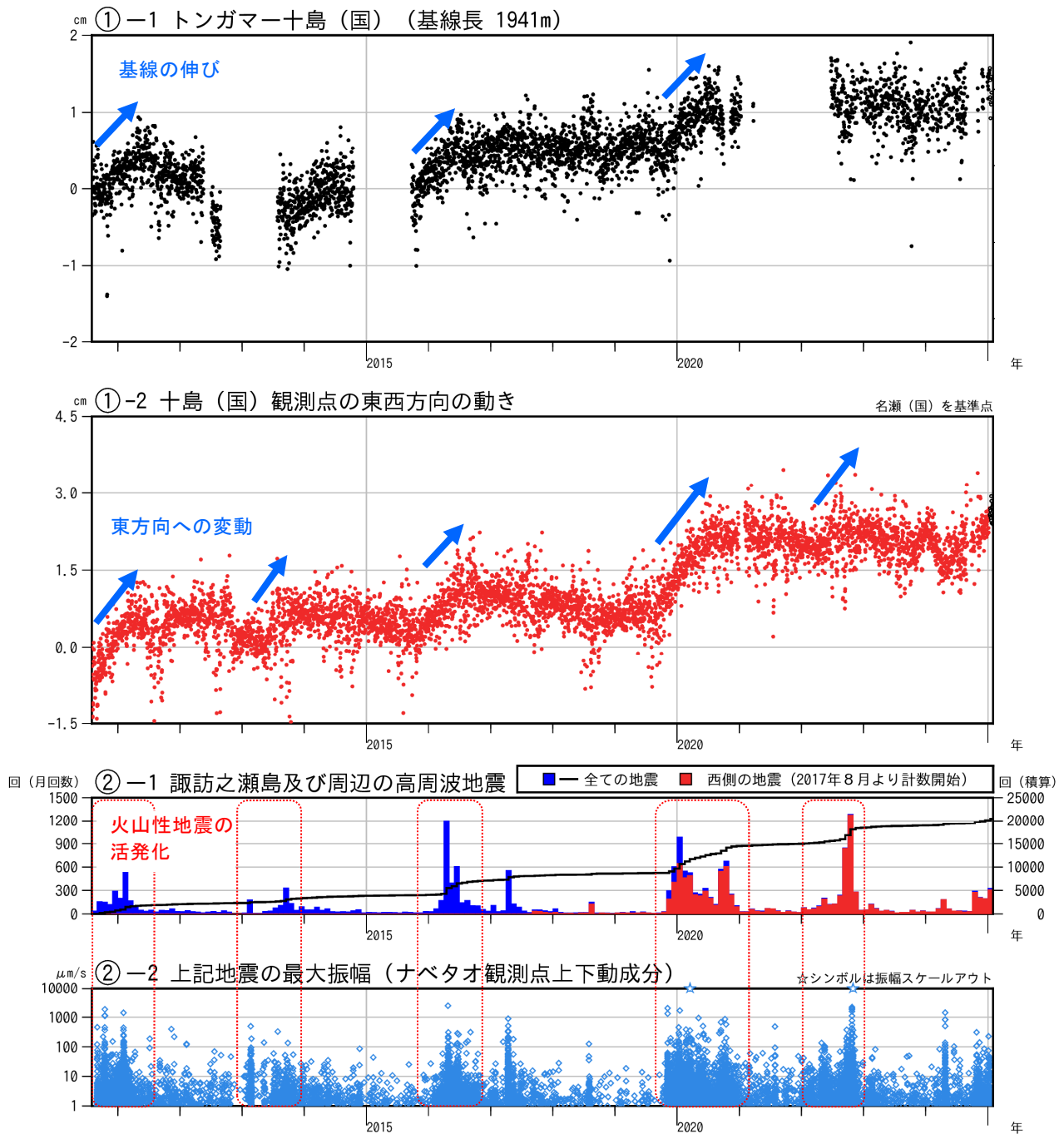


図6 諏訪之瀬島 GNSS連続観測と周辺の火山性地震（2010年8月～2025年1月）

- ・GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側やや深部におけるマグマの蓄積量の増加を示唆するわずかな変動が認められています。
- ・諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しました。

①-1の基線は図7の①に対応しています。①-2は島外の観測点（名瀬（国））を固定した観測点の東西の変動を示しています。空白部分は欠測を示しています。2024年9月1日の観測点修繕工事（トンガマ観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院

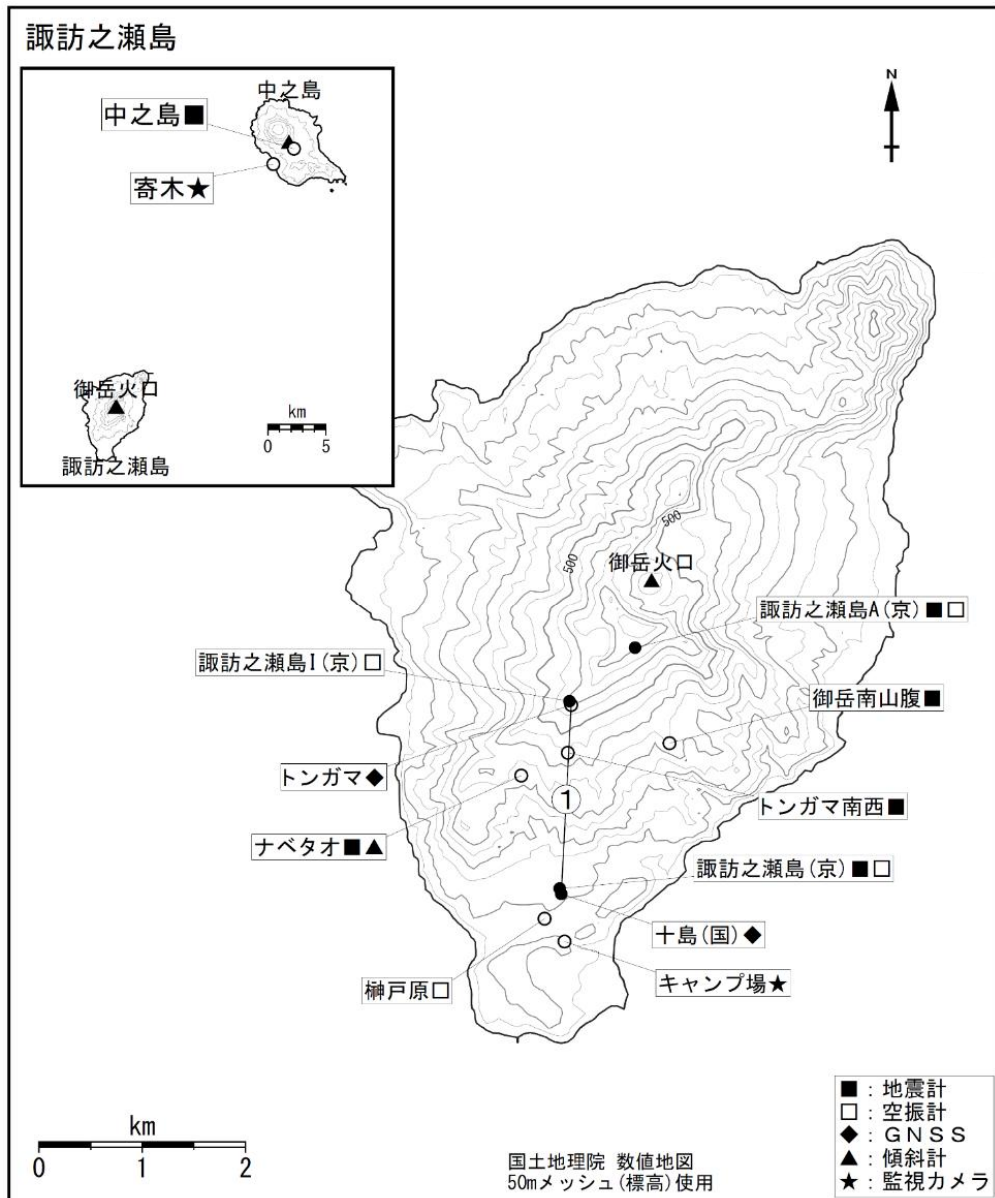


図7 諏訪之瀬島 観測点配置図と GNSS 連続観測の基線番号

白丸 (○) は気象庁、黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学